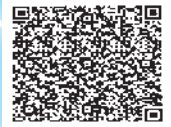




徳島市民病院だより



徳島市民病院の理念

「思いやり・信頼・安心」

〒770-0812 徳島市北常三島町2丁目34番地 徳島市民病院
Tel(088)622-5121(代表)



令和2年1月

令和になって最初のお正月、皆さまはどのようにお過ごしになりましたでしょうか。三が日は天気も良く暖か、初日の出も拝め、いいお正月をお迎えになられたことと思います。院長職を拝命し、早いもので4回目の新年を迎えました。昨年は団塊の世代が75歳以上の後期高齢者になる2025年を目前に、急性期病床削減を目指した地域医療調整会議での議論が全国で沸騰しました。また、働き方改革法案は、医師に対しては猶予期間が設けられましたが、2024年には適応されます。患者さんによりよい医療を提供するために、医師は休日や時間外など関係なく粉骨砕身してきましたが、それらも今までと同じようには認められなくなりそうです。これらに病院としてしっかりと対応はせねばなりません、課題も多くあり、さながら荒海の中を市民病院丸で航海するような思いです。

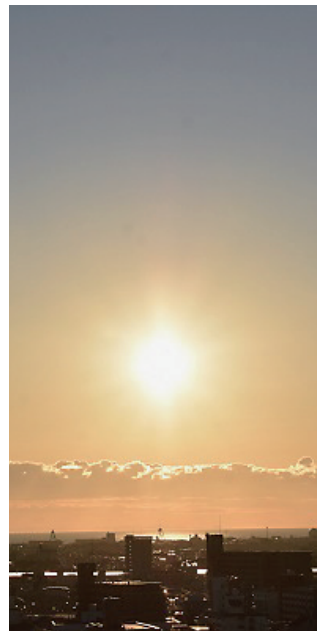
当院は以前より、公的病院の使命として急性期医療、地域医療、災害医療を基盤として充実し、地域の住



三宅秀則院長

「より優しく高度な医療を」

民の方に「ここに在って欲しい」と思われる病院を職員一同が目指し日々努力しております。特に近い将来、高率で発生すると言われている南海トラフ地震など、災害時でも継続的に医療が提供できる体制を、周囲の病院との協力体制も含め、より一層整備充実しなければならぬと考えております。その上で、がんセンター、地域周産期母子医療センター、関節治療センターの3センターを中心に、チーム医療をより充実し、特色のある医療の提供を推進してまいりました。今後もその方針には変わりはありません。また、患者さんにとって診察、治療を受けることは、医療従事者側が考えている以上に不安なことです。そこで患者さんにより優しい病院となるために、それまでの医療相談支援センター、がん相談支援センター、地域連携室、ベットコントロールセンター等を統合して患者支援センターを設置し5年が経ちます。支援センターは、安心して医療を受けて頂くために、外来患者さんおよび入院患者さんの医



令和2年初日を望む

療に関してだけでなく、通院中や入院前・退院後の生活を含めて相談の窓口となることを大きな役割としております。さらに、患者さんのかかりつけ医と当院をつなぐ役割も果たし、患者さんの立場になって、安心して継続的な医療を受けて頂くことを目指しております。本年も当センター機能をさらに充実することは大きな目標です。

さて、自治体病院の7割近くが赤字経営と言われている厳しい医療環境ではありますが、当院として経営健全化は必ず達成しなければならぬ喫緊の課題であります。そのためには収益を伸ばし、支出を抑えるのは当然ではありますが、患者さんに高度な医療を安全に提供するには医療機器の更新は必要です。本年は放射線治療装置でありますリニアックの更新を迎えます。機器更新には、新機器の精度確認や国の認可等にも時間を要し、最低でも約半年間は放射線治療が実施できなくなります。患者支援センターを中心に周囲の基幹病院での治療をスムーズに受けられ、患者さんへの不利益は最低限に抑えるように対応を考えております。

政策医療としての不採算部門にもしっかりと対応し、住民の皆さまに、一層頼りにされ、心より「ここに在って欲しいと思われる病院」を目指して参りたいと考えておりますので、本年もご協力、ご指導のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

地域周産期母子医療センター



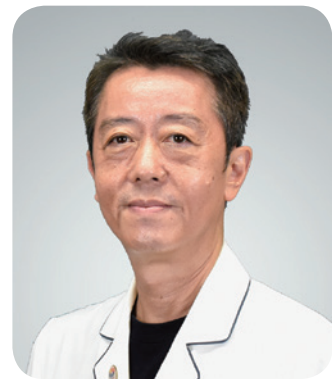
高度な医療体制

当院では産婦人科医師が24時間体制で勤務、緊急性のある妊婦搬送やハイリスク紹介を受け入れ、高度な新生児医療を行うNICU（新生児集中治療室）を整備。安全安心な周産期医療を提供します。

ハイリスク出産に対応

地域周産期母子医療センター長

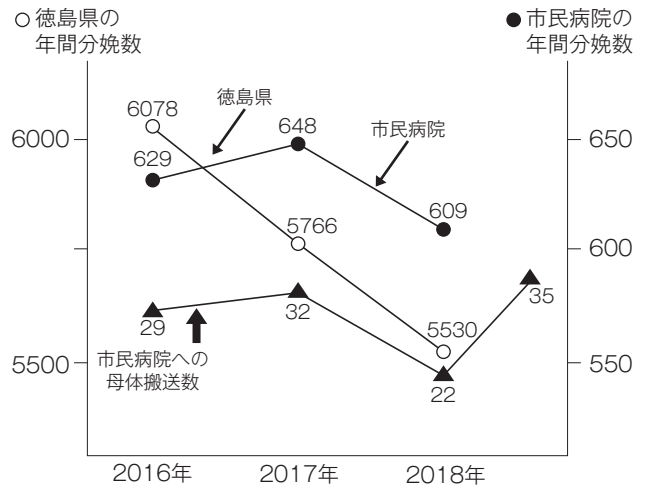
福井 理仁



少産少子化時代 徳島市民病院の役割

徳島市民病院は昭和の時代から令和にいたるまで、徳島県における周産期医療の中心的な役割を果たしてきました。正常分娩はもとより、他の産科施設で扱うことが困難なハイリスク産科症例への対応を、新生児専門小児科医師とともにたくさんおこなってきました。今後もそのスタイルは変わることなく、徳島市の誇る政策医療の目玉の一つとしての職責を果たしてゆかなければなりません。

ところで、昨今の少産少子化の波は徳島県にも押し寄せています。グラフのように、徳島県の年間分娩数はここ2年間で約9%減少しました。当院の分娩数もそれに連動して減少傾向となっています。県内の他



の公的病院調査においても、同様の分娩数減少が明らかになっていきます。それに対し徳島県における低出生体重児の、全出生数に対する比率は増加傾向にあります（低出生体重児比率は平成2年5.5%から平成28年10.2%）。この原因は一概には言えませんが、母体の高齢化や生殖補助医療（ART）妊娠の増加などの影響も考えられます。母体の高齢化は当然のごとく、妊娠合併症や帝王切開の増加、そして早産児や不軽量児の増加などに直結しています。また県外で不妊治療をうけて多胎妊娠となった妊婦さんを、当科でも患者さんの医学的知識量は、ネットなどの影響で年々アップしてい

て、医療側のハイレベルな周産期医療知識や対応が必要となってきています。

このような時代に当院産科が担うべき今後の医療的特質はなにか。それは前述したように、他施設では管理不能な周産期症例を、たくさん引き受けることです。当院はグラフに見られるように、他施設からの母体搬送は減少することなく（2018年度は小児科医師の異動などで一時的に減少）、むしろ増加傾向にあります（2019年度の予測値は年間35件に増加）。また母体搬送以外でもハイリスク周産期症例の紹介が多くあります。これらの症例に対する医療は、産科と小児科（新生児医療）の共同作業によってなされるもので、NICUを保有する当院の独自性の証です。

さらに当院で展開する周産期医療のエキスパート性を高めるために、小児科の市原裕子先生と私は昨年、日本周産期・新生児学会の専門医試験を受験し合格しました。私の場合、徳島県下の公的病院では3人目の周産期専門医（母体・胎児専門医）となりました。今後は働き方改革の行政指導による、産科病院の集約化なども現実味を帯びてきますが、どのような時代であれ当院は、政策医療としての質の高い周産期医療を徳島県民に提供してゆく所存です。

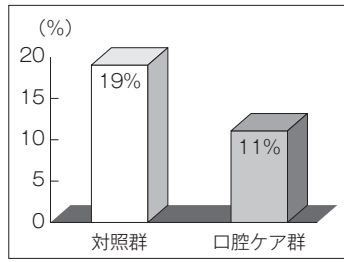
（ふくい りじん）

肺炎など術後合併症を予防

口腔ケア



▲口腔ケアチーム
上田美佳 歯科医師（前右）と3人の歯科衛生士（石川ひさ子さん＝前列、橋本千奈美さん＝後列 左、多田紀子さん）



▲口腔ケアにより誤嚥性肺炎発症率が減少。全国11の特養入所者調査(Lancet 1999)

平成24年の診療報酬改定で、術期における口腔ケアの推進を図るため「術期における口腔機能管理」が新設され、がん治療を中心に術期口腔機能管理に対する取り組みが開始されました。歯科医師と歯科衛生士による包括的な機能の管理により、治療に伴う口腔合併症の減少、入院期間の短縮、患者さんのQOL向上や医療費の適正化など図っています。

術期口腔機能管理

手術前の口腔ケア

全身麻酔の手術では、気管内挿管の気管チューブによって口腔内細菌が肺へ送り込まれると、術後の肺炎の原因となります。また動揺菌があるとチューブの挿入時に脱落する危険性があります。

術期の口腔内の状態は絶飲食、気管内挿管・経鼻胃管などの異物、開口固定によって口腔内の汚染は不可避であり、口腔衛生状態は悪化します。特に術後に誤嚥が起りやすく、誤嚥性肺炎を招来するため、口腔衛生保持のために口腔ケアが必要となります。

化学療法時の口腔ケア

抗がん剤治療の際には、口腔内に発生する口内炎や歯周感染症の悪化が原因で生活に支障を来したり、治療が中断することもあります。このような副作用を少なくするために、治療開始前から歯科での口腔機能管理が重要となります。

術期口腔管理の施行によって、手術後の経口摂取再開の支援や化学療法時の経口摂取の維持によって患者さんのQOLの向上を図ります。

平成30年には整形外科や脳神経外科など対象患者の適応が拡大されました。徳島県歯科医師会は、徳島市民病院でがん治療を受ける患者さんが、がん支持療法としての術期管理を受けるため、また市民病院と地域歯科との連携を円滑に進めるための事業を平成26年度から行っています。2階Eプロックに口腔ケア外来を設け、歯科医

師と歯科衛生士のチーム4人が術期管理を担当しています。術期管理は治療前または治療中の患者さんに対し、医科担当医師から歯科との連携の提言が行われた時点で、地域歯科医院への診療情報提供に加え、既往歴、各種検査結果など伝えて、また受診を円滑かつ確実にするため歯科受診の予約も致します。入院中の場合は病棟訪問して専門的口腔ケアを行い、細菌や汚れの除去、口内の保湿、粘膜清掃指導など実施。さらに担当医師、外来看護師、医事経営課、歯科医師会連携室との連絡をシステム化し、連携作業の円滑化に努めています。平成30年度は446人の術期管理の依頼があり、うち432人の患者さんに歯科受診をしていただきました。病棟への訪問診療（歯科処置や口腔ケア）と術期管理中の患者さんの口腔ケアを合わせた病棟ラウンドは延べ2193人となりました。（口腔ケア外来 上田美佳 歯科医師 徳島県歯科医師会）

リレー版 研修医日記

臨床研修1年目 大道 如毅 はじめまして。ご覧いただきありがとうございます。

普段は研修医として各診療科、救急当直で働いています。

今は当直が楽しいです。一番、自分の力が直接発揮できる場だと思うからです。何を問診、検査するか、患者さんを診るより前に流れを組み立てています。当直がなかったり救急専門医がいて数も多くいたりする病院と違い、相対的に重要な役割を担えるのが市民病院のいいところです。もっとできることを増やして進



化していきたいです。

休みの日はピアノを弾いたり、ドラマや映画を見たり、音楽を聞いていたりしています。好きな映画のジャンルは洋画のアクション系で、ミッション・インポッシブルが特に好きです。音楽は sumika がおすすめです。

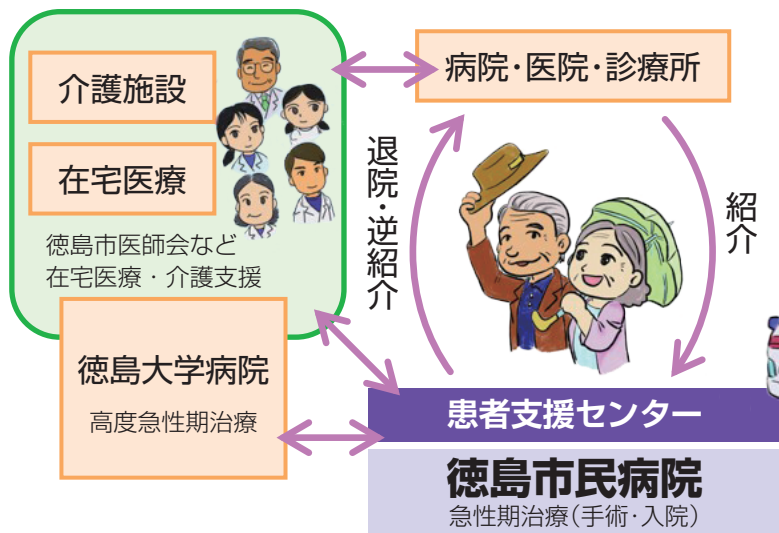
旅行も好きで、海外だとアメリカ、

イギリス、タイに行きました。今度はドイツに行きたいと思い勉強中です。ツアーよりは現地の人とコミュニケーションを取りながら冒険したいタイプです。あと、現地の言葉で！旅行でよかったところ、ぜひ教えてください！

新しいことに挑戦するのが好きで、最近はお装にはまっています。こちらでもまた進化していくつもりです（笑）。

少しでも共通の趣味のある方がいたらお話ししてみたいです。

市民病院には熱心に指導して下さる医師がいて、設備は充実して、すばらしいコメディカルの友達がいる、今の環境にとっても満足しています。市民病院を選んでやっぱりよかったと思います。これからもどうぞよろしくお願ひします。



地域医療になう 病院連携

紹介患者断らない



当院は公立病院として救急医療、がん医療、周産期母子医療、災害医療の政策医療分野で大きな役割を担います。同時に地域中核病院として、紹介患者の迅速な受け入れや逆紹介・入退院支援など地域医療連携の促進に努めています。

「ここに在って欲しいと思われる病院を目指す」。三宅院長を先頭に、昨年より「紹介患者は断らない。救急受け入れ強化」を掲げて、日勤帯におけるすべての患者の受け入れと初期診療を行うことに全力を注いでおり、組織で対応できるようにシステム化致しました。

そして、地域医療連携の促進を円滑に進めるため、平日19時、土曜日17時まで委託職員を置き、紹介医療機関から診察予約のFAX受付を即座に対応できる体制をとっています。さらに登録制であるMEDIPostというクラウドサービスも導入し、先生方からの紹介状や、取り扱いに配慮が必要な診療情報等も簡易にやりとりできるよう整備致しました。

一方、高度専門医療においては、専門的なチーム医療を提供するためにセンター化を採用していま

す。がんセンターは、がんのトータルケアを提供し、緩和ケア病棟充実へ先駆的に取り組んでおります。周産期母子医療、関節治療の2センターも地域医療の中核を担う施設として医療体制を強化してきました。

現在、患者支援センターのスタッフを中心に、徳島大学病院医局や登録医(321名)を訪問(遠方は郵送)し、日頃からの紹介の御礼、今後の情報提供、当院への要望等を傾聴しています。なお、直近において勃発した患者受け入れのトラブル等があった場合は、即座に訪問し対応することで、より密な連携を構築しています。そして今年度より積極的に医師にも同行訪問していただき、顔の見える関係から顔が分かる関係へと、更なる地域医療連携強化を図っています。

かかりつけ医である診療所、他の医療機関の先生方から信頼していただけるよう、また連携の軸となる患者支援センターの充実等、スタッフ一同、努力を続けてまいります。今後とも、ご支援、ご指導の程よろしくお願い申し上げます。

(患者支援センター 森田敏文)

頭頸部がん

「頭頸部がん」は顔面および頭蓋底から頸部にかけての領域に発生する悪性腫瘍の総称で、ほとんどが扁平上皮癌です。わが国では頭頸部がんの全がんに占める割合は約5%で、大腸がんや肺がんなどの5大がんと比べるとずっと少なく、発生部位別の口腔がん、鼻咽癌がん、上咽頭がん、中咽頭がん、下咽頭がん、喉頭がんに分けられるとさらに少なく、希少性の高いがんです。

咽頭17%、上咽頭3%、鼻咽癌8%、唾液腺6%などとなっています。大体1万人に1人の発生頻度で、徳島県では年間約80人が新しく頭頸部がんと診断されていますが、肺がんの場合の2,000人と比べるとずいぶん少ないです。

2005年のNBI(narrow band imaging:狭帯域観察)の登場以来、咽頭・喉頭がんの早期発見も可能となってきています。しかし頭頸部がんは症状が現れたときには進行がんとして見つかることが多く、

予後不良であるだけでなく、がん自体あるいはその治療で摂食や呼吸、会話などの重要な機能が損なわれ、その後の生活にも大きな影響を及ぼします。頭頸部がん診療は耳鼻咽喉科が窓口となりますが、その治療では、耳鼻咽喉科だけでなく放射線科や腫瘍内科の医師、看護師や歯科衛生士、栄養サポートチームなどメディカルスタッフなど多職種が対応にあたり、がんの治療とともに機能を維持することに努めています。

(耳鼻咽喉科総括部長 田村公一)

がん豆知識

15